佐多稲子全集

第八巻／体の中を風が吹く

講談社

佐多稲子全集　第八巻

昭和五十三年七月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／豊国印刷株式会社
製本所／藤沢製本株式会社
定価／二八〇〇円

©佐多稲子　昭和五十三年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan

0393-152781-2253（0）　（文1）

目次

体の中を風が吹く　5
愛とおそれと　178
＊
三等車　334
車輪の音　340
あるときの接触　351
あとがき・時と人と私のこと　(8)
初出誌紙・発表年月　376

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

佐多稲子全集　第八巻

体の中を風が吹く

街の音

日曜以外なら、それは毎日同じなのだ。五時を過ぎた日比谷交差点では、有楽町へ向って人が広い幅になって渡ってゆく。そして今日も、薄黄いろい陽ざしの中を、ゴー・ストップでひと区切りされて渡るおびただしい人の流れ。その上を、台風をおもわせる強い風が、ざわっ、ざわっと大きくふくれて吹き通っていた。堀ばたの柳が、疲れた色で荒っぽくなびいている。自動車の警笛がいどむように空いっぱいに叫び上げ、日活会館の建物が知らん顔で見おろしている。そして映画の絵看板さえ音のない騒音。

だから人々の足音は聞えない。肩が触れ、前とうしろにくっついてゆく人の足音、それは沈んだまま音にならない。それは、ひとりひとり、自分だけ知っている。

村松章子のローヒールの足音も、今日はそこに混じっている。が、彼女は自分の足音だって聞いてはいないのだ。まだ半そでのワンピースだが色だけはもう黒を着ていた。すそのせまい黒の服が、神経のとおった身体の線を見せている。無造作なショートカットの髪を服と同じ色のベレエで押えている。仕事カバンを抱え、疲れて少しあおい顔をしている。無愛想な表情で、だから筋のとおった細めの鼻が冷めたく見える。

そんな章子の姿は人目には仕事を持ってものおじもしない確かさに見えた。三十を越した年齢などはかき消されて、いわばさっそうとしてさえ見えた。今日彼女は、雑誌の記事を取るために、今まで家庭裁判所で、調べごとをしていたのだ。その調べた問題もうっとうしい。離婚の数や内容、子どもの養育費の、夫側の決定不履行。章子にとって事新しい結果でもなかったし、だから、ただそのあとの気分に、うっとうしい影となって映っているばかりだ。

五時半から六時までに銀座で正木省吾とあう約束だから、彼女はそこへ向って歩いている。省吾の友人

の、安川夫妻が一緒のはずだ。あるいはその安川たちも、今ごろ日比谷の交差点を渡ったにちがいない。部屋を探している安川たちは、心を弾ませて歩いていたのかもしれない。

章子は埋立てのはじまってごたごたした数寄屋橋をすぎて、四丁目のオリンピックへ急いだ。店へ入って見まわしたが、正木省吾はまだ来ていない。安川たちの顔は章子は知らないのだ。

「コーヒーちょうだい」

ベレエをとってぱらっと髪を振った。

「冷めたいのにいたしますか。ホットにいたし……」

「あ、あったかいのをね」

聞かれる途中で言って、カバンの中から煙草をとり出した。一服すうっと吸って、身体をイスにもたせたとき、正木の姿を入口に見つけた。章子はその姿勢のまま、黙って軽く手を上げて合図した。

「早かったね」

正木は微笑して寄って来た。気が優しいから彼の微笑は内気に見える。グレーの半そでシャツをきて、男にしては白い細い腕をしていた。

「今、来たとこよ。その人たち、まだ?」

「そうだな」

と、正木は店の中を見まわした。

「なんだ。こっちが先きか」

正木は自分もコーヒーを注文してそう言う。章子は正木の前に煙草の箱を押してやりながら、自分たちの方が先きで、ああよかったとおもうのだ。だがそれは黙っている。

「今日、その部屋を見にゆくこと、君の隣りの家じゃ、知ってるの」

「知ってるわ」

「その家の人たち、いい人かい」

「善良な家庭よ」

人のために部屋を世話したって、という気だから、章子は義務的に答える。それに、正木の前で、若い夫婦を見るなんて、今の章子は気が重いばかりだ。が、正木の方はそんな章子の感情はわかっていないらしい。すると章子は自分の痛いところにわざとさわってみたいように言い出した。

「安川さんの奥さんって、若い人? 若いんでしょうね」

「そうだよ」

ちらっと、正木は章子を見た。
「まるで、子どもみたいな夫婦さ」
正木は章子の気持を軽くなだめたつもりだった。章子はわざと知らん顔で視線を外している。
「いい部屋らしいね。この前の話だと。僕も見たいんだけど」
「ひとの部屋なんか見たってしょうがないわ」
「そうでもないさ」
正木もちょっと気を悪くした表情になって、煙草のけむりに目をほそめた。章子は自分の家に正木を決して呼ぼうとしない。今日だって、章子の隣家に安川が部屋を見にゆくのだって、正木は連れてゆかない約束なのだ。正木にも章子が自分の家には、彼を連れてゆきたがらない気持はわかっている。
「まあ、いいよ」
何となく正木は言った。
「罪な話よ」
と、章子はぽそっと言った。
「どうして？」
「どうして、って……」
「だから、いいじゃないか。相手は喜んでいるんだ」
「そりゃそうでしょうけど」
部屋が無いことぐらいなら、何とでもなる、と、そんなおもいを章子は胸の中でつぶやいている。
「私のこと、知ってるの？　その安川さんって人たち」
「うん」
と、正木はあいまいに答えた。章子は先手に出ようと、
「まあ、言う必要もないわね」
正木はあきらかに詰まって、不きげんな顔をした。追込みをかけられたようで不愉快なのだ。正木は単純に、友達のために役に立つのを喜んでいた。章子と自分の関係は安川には言っていない。安川夫婦が章子の隣りに住むようになれば、いや、もっと早く今日にも、章子の境遇は知れてしまう。
そんな二人の中に、安川の明るい声が入って来た。
「や、どうも、おそくなっちゃって」
章子は素早く、安川啓太郎のそばに、その若い妻を見ていた。
安川夫妻が並んであいさつするとき、この二人の背丈は同じに見えた。

「千枝子です」
と、安川啓太郎は初対面の章子に、自分と一緒に妻を紹介したが、何となくちょっと照れる、というような表情をした。濃い眉が少し下り気味で、常に微笑をふくんでいるような目だ。それで人が好く見える。が、あごのあたりの線は太い。
「どうぞよろしく」
かざり気なく千枝子は夫に紹介されたあとに腰を曲げた。丸い口元など優しい。が表情がさっぱりしていて、女同士の章子には、それが気易かった。格子じまの木綿のブラウスに紺のスカートで、どこででも見られる職業婦人の印象が、銀座などを歩いていれば、彼女が家庭を持ってみそ汁を作っているとは気づかれないかもしれない。坊や刈りなどといわれる短くカットした髪には、ウェーブもなかった。
「今度はほんとに大助りなんですよ」
と安川はもう、その部屋を見ない前から、借りると決めているらしい。
「お気に入ればいいんですけど」
と、章子は形どおりに言い、給仕が待っているのでその方を気にした。
「何をお飲みになる？」
「あ」
と、安川はそこで気がついて正木と章子のコーヒーを見た。
「じゃ、僕もコーヒーを。君は？」
と、千枝子に聞く。千枝子は即座に、
「私、オレンジ・ジュース」
「かしこまりました」
給仕が引返してゆくと、正木が章子のあとをついで、
「そりゃまあ、アパートなら面倒は少いがね」
「いいや、何だっていいですよ。何しろ権利金なしで二間借りられれば、こんなありがたいことないですよ。このごろはアパートもずいぶん建っているらしいけど、新築ならやっぱり高い権利金を言うらしいですからね」
「二間ったって、六畳と三畳ですよ」
と、章子は、安川のあんまり弾んでいるのについ自分もほほ笑んだ。
「結構ですよ。それだってちゃんと二間ですよ。何しろ現在の部屋は僕が学生時代からいるんで気はおけな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いけど、結婚したとき、強引に居坐っちゃったんでね。家主もあきらめていたらしいけど、今度そこの息子が結婚するんですよ。そいで空けてくれ、と言われちゃって」

千枝子もオレンジ・ジュースのストローを口からはずして、あけすけに言い出した。

「権利金なんて、やっぱり安くったって二万だ三万だって言いますものねえ。ちょっといいと五万でしょう。それで二間あるとこなんてめったにないですもの」

「そうだねえ」

と、正木が首を振った。安川は自分たち全体を自ら茶化す、とでもいうように、

「いや、われわれには、二万、三万なんておいそれとなかなかまとめて出せませんよ」

「そりゃア、そうですね」

章子がそれにはしんから同感を示して、

「じゃ出かけますか？」

「正木君、君も行ってくれるの？」

「いや、僕はちょっと……」

と、正木はちら、と章子を見ながらその場をつくろった。

丁度そのころ、吉祥寺の山崎孝夫の家では、妻の静子が台所で夕飯の仕度をしていた。

「多美ちゃん」

と、郷里の九州なまりの残る、下に押えた呼び方で娘の名を呼んで、

「あんた、帰ったばかりで悪いけど、おぜん出してよ。今日はホラ、二階を見に来る人があるでしょう。早く御飯をすませておかんと」

「今日、二階借りる人来るの？　どんな人かしら、いやな人だといやねえ」

座敷の方から多美子が答える。いやな人だといや、と分り切った言い方だ。着更えをすませた花模様のワンピースの、わきのチャックを上へ引き上げながら出てきた。今年高校を出て、新宿のある百貨店に勤めている。小柄で、全体どこもかしこも丸いという身体つきに、まだ少女っけが残っている。

静子の方はすらりとやせ形で、多美子に似ていない。多美子は父親の山崎孝夫の方に似ている。静子はフライパンの中のひき肉の団子を裏返しながら、

「そりゃあ、おたがいにひとつ家に暮すんだから、あんまりいやな人ならこっちだってことわればいいでしょう」
「あっただけで分る？」
かたっかたっと茶わんの音を立てながら多美子がいう。
「そりゃあ、大体分るでしょう。第一印象ってものがあるでしょうよ」
「人って、なかなか上べだけじゃわかんないそうよ。母さん自信ある？」
「上べだけじゃわからないってこともあるけどさ、そんなもんでもない。そりゃあ、あんたたちはまだほんとうの人生の経験しないからあぶないけどね」
「ふん」
と、多美子はその問答を打切った。すぐそれをやられる、と多美子は内心でおもう。ことごとの母親の、娘に対するけん制だ、と彼女は気づいている。
「お父さんは？　お父さんの茶わんも出しておくの」
「あ、お父さんは遅いらしいよ。あとでいいわ」
キャベツのきざんだのをのせた皿に、ハンバーグをおいて茶の間へ運びながら、
「隆ちゃん、御飯よ」
と長男の中学生を呼んだ。
「おっ」
と答えて、アンダーシャツ一枚の隆が縁側を歩いて来た。隆の方が母に似ている。多美子が早速言う。
「何よ、その恰好」
「どうしてエ。どうして悪い」
「二階借りる人が来たら、みっともないわよ。これからいつもよその人がいるんだから、あんまりお行儀悪くしないでちょうだい」
「そうお？　だって」
と、隆は不服そうに母を見た。静子は黙って御飯をよそった。多美子の言ったことや、不服そうな隆の言い方で、静子もこれからのわが家というものを改めて感じる。昨年夫が、長らく勤めていた会社を定年で退いた。ようやく今年の春、今までの勤めの関係で、子会社にひとつのイスを見つけたが、隆はまだこれからだ。
表には石の門柱もある家、そのすぐ北側に線路が近くて、引っきりなしに通る電車のひびきが、この時間の忙しさを伝えていた。

玄関に足音が聞えたとき多美子は、そらっ、というように母の顔を見た。
「おいでになったね。あんた、ちょっと片づけとい て」
静子は多美子にささやいて髪を手で押えながら玄関へ出てゆく。
「あら、お食事中でしたか、少し早かったかしら」
章子が先きに立っていた。家の周囲をながめていた安川が上目づかいに頭を下げる。
「いいえッ、もうすみました。どうぞッ」
静子のこの、どうぞッ、というのも長崎のなまりだが、このときは語尾がぴっとはね上る。
「失礼します」
「お待ちしていました。主人はまだ帰りませんけど、どうぞッ」
「じゃ失礼して、お部屋を拝見なすったら。私はここでお待ちしていますわ」
「そうですか、じゃちょっと」
安川夫妻はくつを脱いだ。隆が通りがかりというふうに安川たちを見て廊下をよこぎってゆく。
二階への上り口は玄関の前についていた。静子が案内をして安川たちが二階へゆくと、茶の間と台所をゆき来していた多美子が、
「おばさんも、おあがりになったら」
「うん、私はいいの。今日はお父さんはまだ?」
「ええ」
玄関へ座ぶとんを持ってきて、
「マリ子ちゃんたち、さっきまでそこで遊んでいましたわよ」
「そう」
答えたとたん、章子の表情から、ふうっと、今までの張りが消えた。が何も言わず、そこでも煙草を取り出してマッチをすった。上り框に腰をかけて煙草を吸う章子の姿も、今は肩を落していて、妙にわびしく見えた。
章子の家はこの家と隣り合って、その台所は向い合っていた。もとは右隣りの家の一部だった土地に、三年前に建てたので、この辺りの、生垣もあるしっかりした屋並みの間で、彼女の平家はちんまりしていた。
二階の用事は終ったらしい。話しながら降りて来る。

「台所がね、一緒だからおたがいに不自由ですけど、ま、それも仕方がありませんわね。何とかやってゆきましょうよ」
静子はすっかり安川たちに貸す覚悟を決めたらしい。章子は素早く元の表情に返って、
「如何でした？」
「結構ですわ」
千枝子がおずおずとしかし弾んで言う。
「よかったですね。じゃ私は……」
と、章子が立ち上ったとき、走ってくる小さな足音がして、おかっぱの少女がのぞき込んだ。くりっと探るようにみんなを見まわしたその下から割り込むようにもう一人、四歳位の男の子が頭をさし出す。
「あら、なアに、あんたたち」
章子がとがめるように言うと、男の子が勢づいた早口で言った。
「だって、お母ちゃんが帰って来てる、って、ふみえさんが言ったんだもん」
「さあさあ、じゃ帰りましょう」
章子は子どもに向って言いながら、安川たちの前にもあけすけに母親らしい様子を見せた。
「早速出て来るんですもの、しょうがないわね、あんたたち。さよなら、さよなら、を言って……」
「さよなら」
男の子が投げつけるように言うのを、章子は、しょうがない、という顔で笑った。
「じゃ、私、失礼しますわ。帰りの道、おわかりになるわね」
「ほんとうにどうも、ありがとうございました。いずれ御報告にうかがいます」
「ほんとうにどうも」
と安川たちは、子どもと連れ立った章子を、改めて見直すような顔をしていた。
「やっぱりお母ちゃんが帰っていらっしゃると、うれしいのね」
静子がそう言うのに章子は、はん、と軽く笑って、
「なんてことはないのに、じゃ……」
その章子の腰に子どもたちが両方からつかまった。
裏口へまわって台所からわが家へ入ってゆくと、手伝いの三好ふみえが敷居に突っ立って、
「お帰んなさい。おとなりへ越して来る人、来たんですか」

パーマネントの髪を、ぱさっとひろげた三好ふみえは、がしゃがしゃっと早口に言った。章子よりはずっと若いがそれでも三十に近かった。

章子の郷里から出て来て、このうちの家事と、二人の子どもをあずかっている。あけっぴろげの気の好い性質で、章子は助かっている。

「それで来ることに決まったんですか」

「らしいわよ」

「どんな人です。わたしもこれからつき合ってゆかなきゃならないから」

ふみえは章子のために夕飯の仕度をしながら、さばさばと突っ込んでいる。

「いい人らしいけど、何もそんなに関係はないわよ、あんまりうるさくしない方がいいわ」

「だけど、台所がくっついているんですからね。いやでも朝晩のあいさつはしなければならないんですから」

「ま、そりゃそうね」

三間の家の中の座敷は、男の子のおもちゃで散らばっていた。長女のマリ子は小学校の三年生、弟の晃一は四歳のいたずらざかりであった。マリ子はいつもじいっと人の顔を見つめる女の子だ。今も、早速漫画の本を二、三冊持って茶の間へ坐ったが、母とふみえの話は聞いていた。晃一は母の前に存在を主張するようにわざと座敷を走りまわっている。

「晃ちゃん、少し静かにしてエ。お母ちゃん、御飯食べるんだから」

章子に言われてもまだぐるぐる走りやまないまんまで晃一は高い声を出す。

「お母ちゃん、今日のおかず、しょっ辛いぞ」

「あらッ、いやだ」

ふみえは、あっはっは、と笑って、おぜんの向うから自分の顔の前に片手を立てて、拝む真似をした。

「これですよ。かんべんですよ。お塩入れすぎなんです。ちょっとばかりからいんですよ」

「なんでもいいさア」

章子は自分ひとりのぜんに向った。それにふみえが、早速言い出した。

「ちょっとお願いがあんですけどね」

ふみえの五反田の叔母が、話があるから一度来い、という端書をよこしたという。ふみえはそれで明日にも行って来たいと、いうのだった。こんな場合の、話

があるというのなら縁談にちがいない。
ふみえは座敷にふとんを敷くと、銭湯へ出かけて行った。章子は晃一のとなりに自分も横になったが、今夜は仕事が残っていたから、晃一が寝ついたらまた起き出すつもりだ。
晃一は寝床の上でもまだはしゃいで、毛布を脚でけり上げ、えいッ、と叫んでは身体を波打たせている。たびたびどすんと音がする。章子はそれも知らん顔で仰向けに天井を見上げていた。
「いやだア」
と、マリ子が晃一の向うでおこっている。
「寝られなアい」
マリ子は高い声を出す。晃一は妙に興奮していて、息を荒くしてごろん、ごろんと、転がる。
「お母さん」
と、ついにマリ子は、知らん顔をしている母にも文句を言うように、
「晃ちゃんおこってよ。寝られやしない」
「晃一」
と、章子は顔を向けて、
「いつまで騒いでんの。静かに寝なさい。電気消すよ」
「暗くったって平気だい。マリ子、明日おみやげ買ってきてやんないから」
「そんなに騒ぐ子、ふみえさん、五反田へ連れてゆかないってよ」
「行くさア。連れて行かないって言ってもついて行くもん」
へらず口をきいたが、章子がまくら元のスタンドを消すと晃一は、ふっと静かになり、まるでうそのように、すぐそのあとで寝息を立てた。
ふみえに縁談があるとすれば、引きとめるわけにはゆかない。そのあとのことが章子の心に引っかかっていた。引っかかりながらそのことだけを考えているわけでもない。正木省吾と今日あったときのこと、安川夫婦の印象、家庭裁判所での調査など、いろんなものが混り合って心に浮んでいる。一体に章子はその日の出来ごとをこまごまといつも反省する性質だった。胸の中にくり展げられるおもいには、ふいに過去のあるときの情景も浮び上ったりして、そのときどきの自分の姿が、まるでそれを見ていたように描き出される。
宇都宮の旧家に生れて、女子大を出るとすぐ結婚を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com